

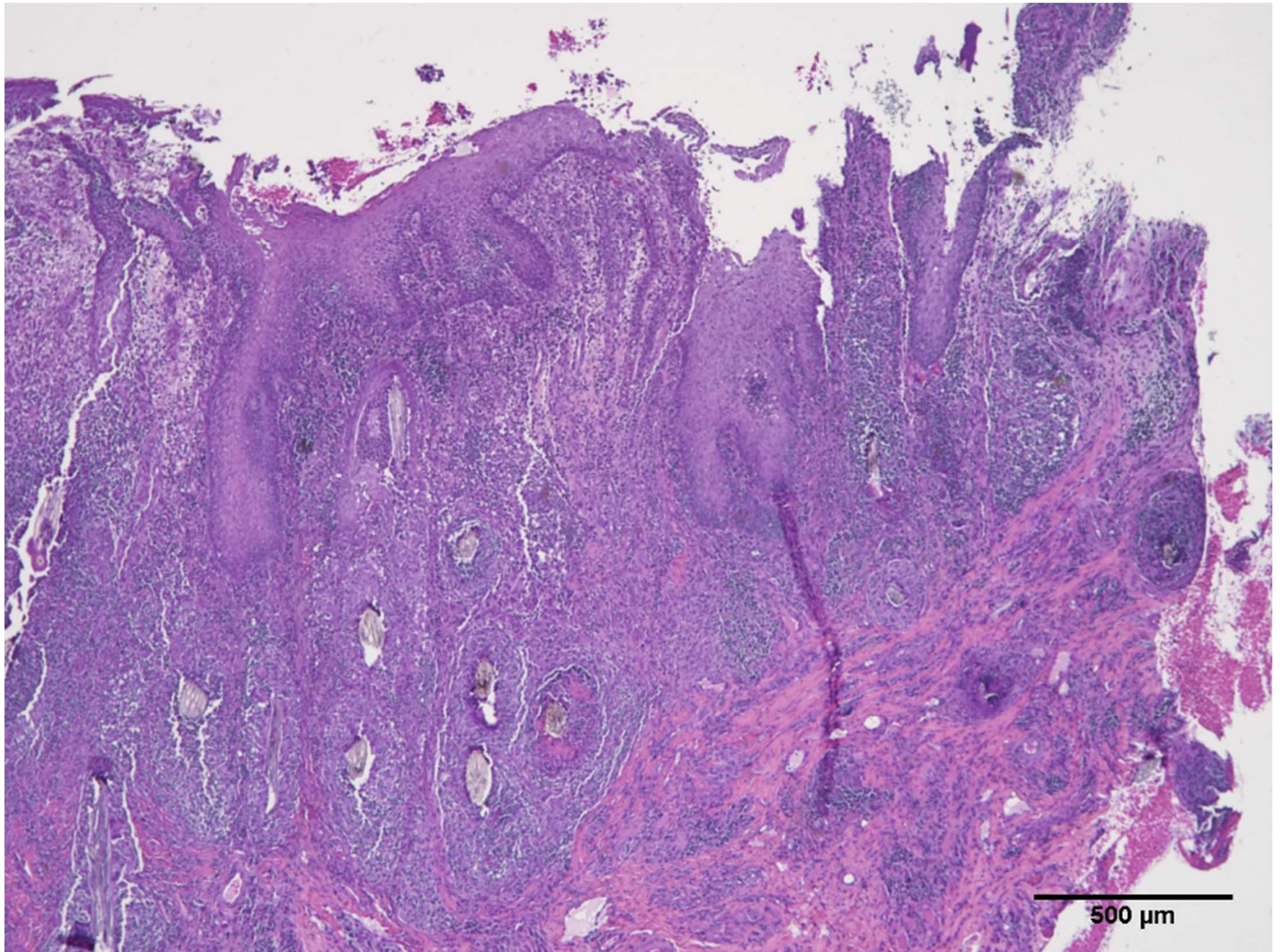
2018-15-4

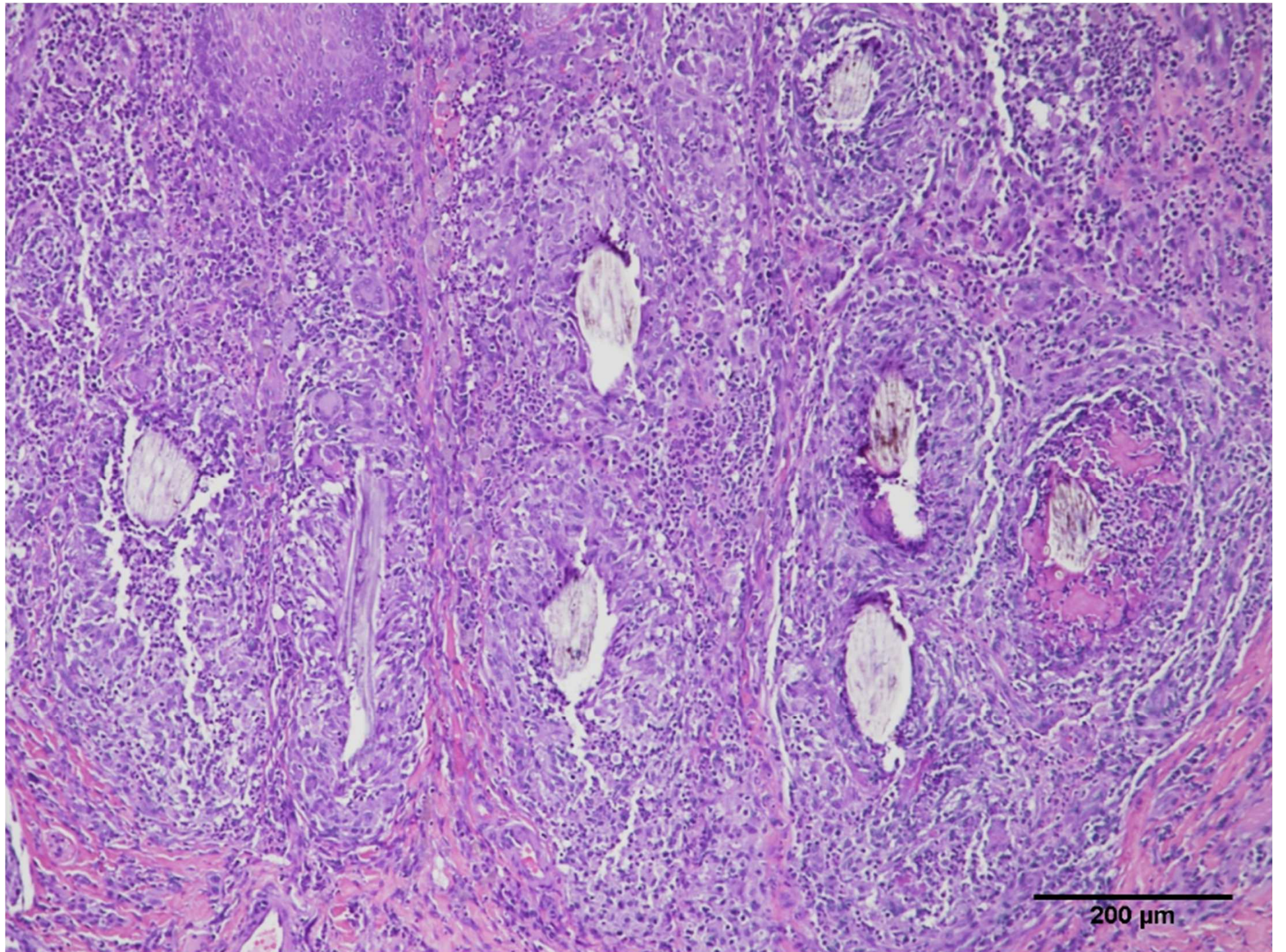
犬 舌

寺山 好美

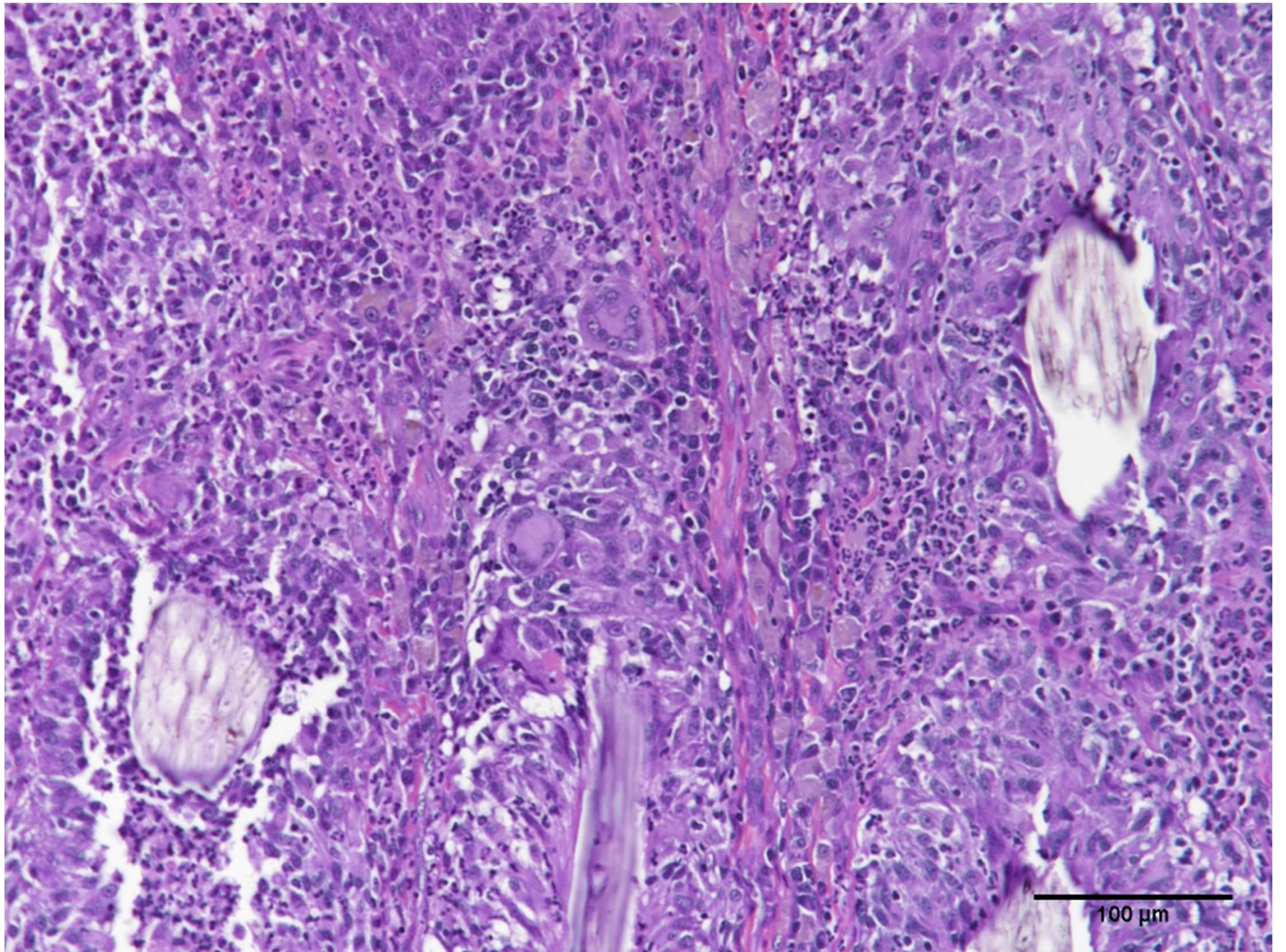
- 提出機関：Oregon State University Diagnostic Laboratory, USA
- 症 例：犬（雑種）、去勢、3歳
- 病 歴：舌尖から3分の1の領域に固く隆起したプラーク（局面）を形成。
当初は、プレドニゾロンと抗生物質による治療に反応していたが、以降改善しなかったため、2度にわたり舌病変の外科的切除術を実施。
手術後、当該犬はほぼ改善し、小さな限局性の病変が存在するのみとなった。
- 実験室内検査：実施されていない

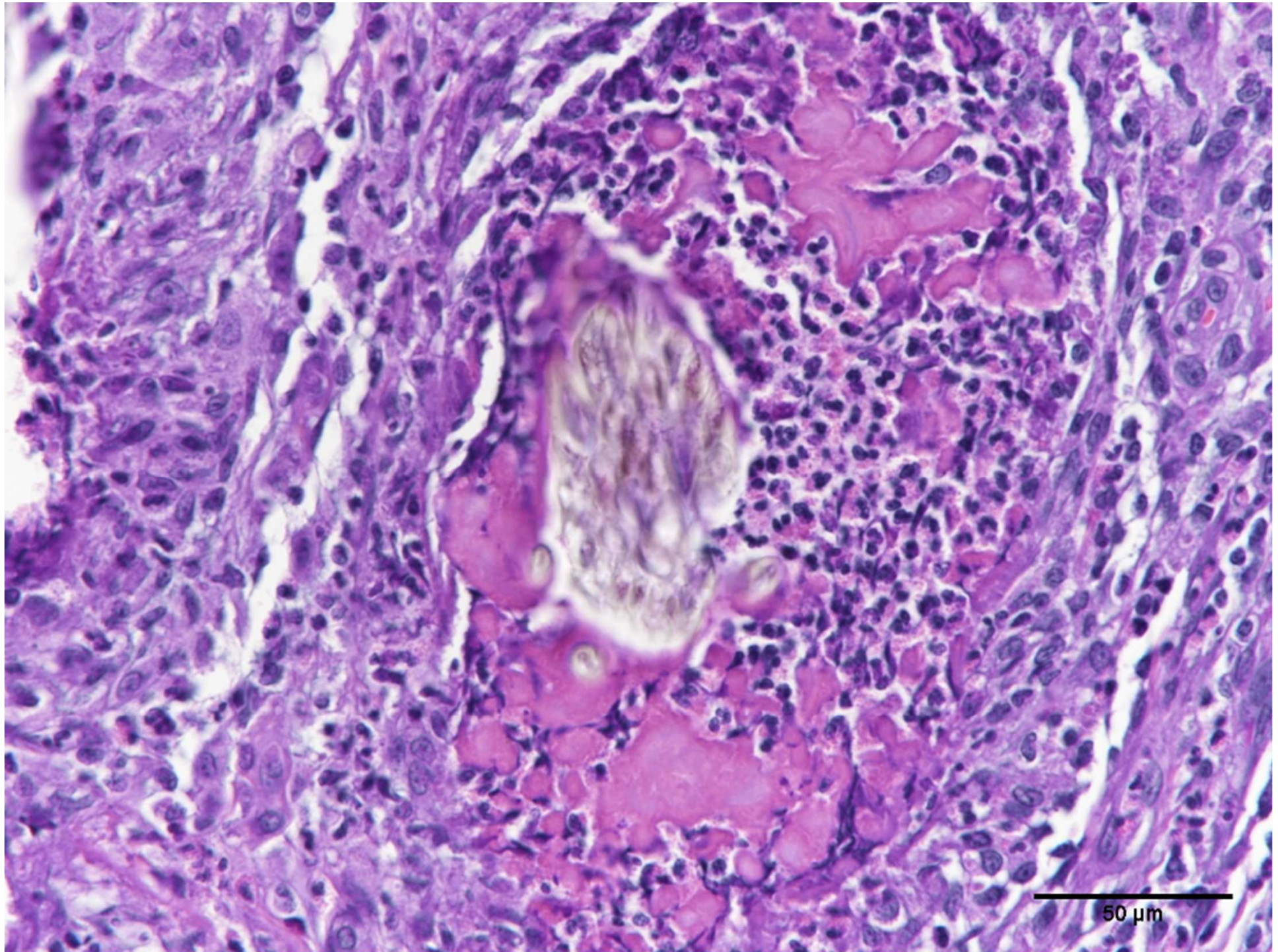


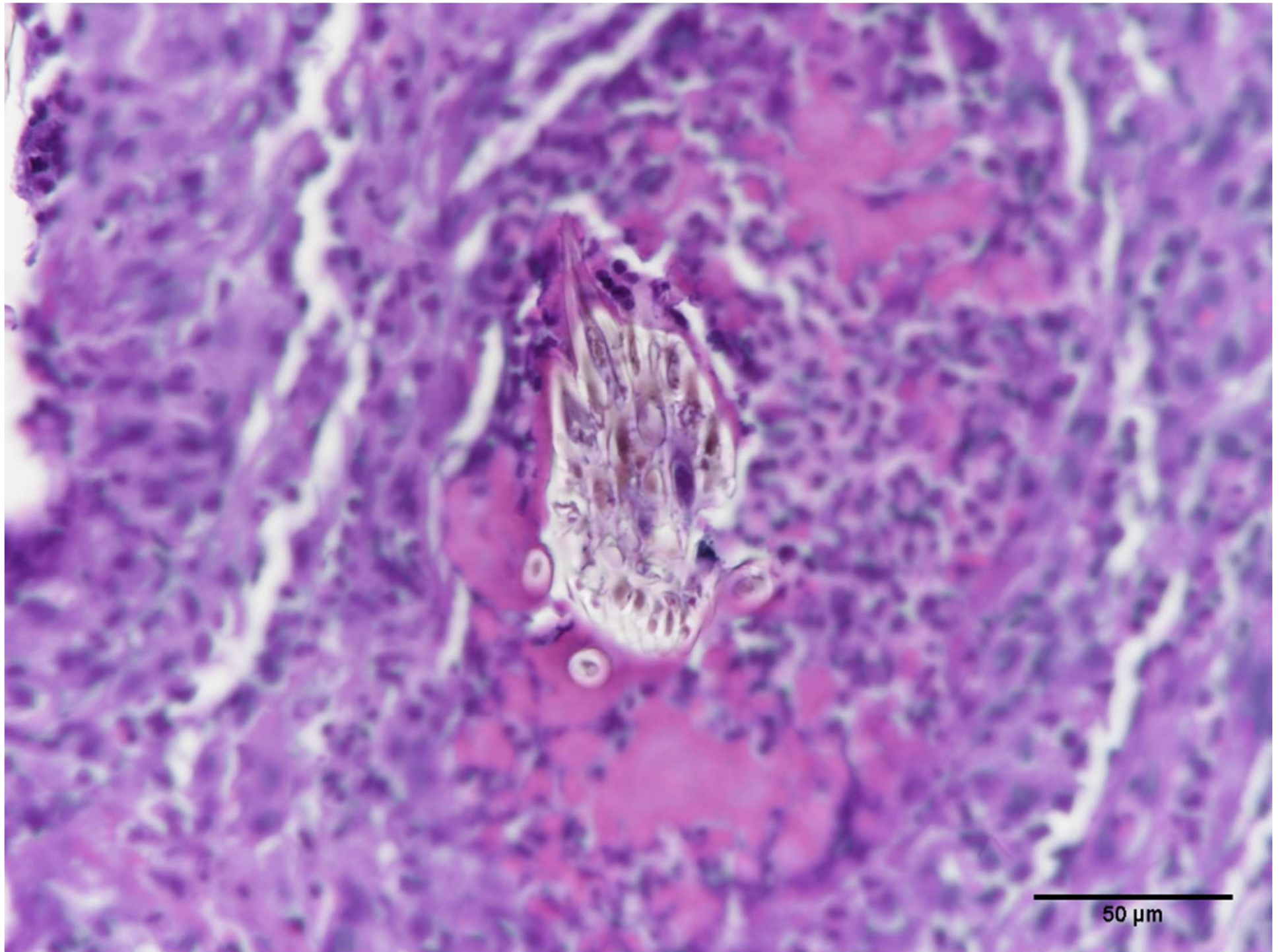




200 μ m







提出者の診断

- 舌：重度、多巣性から融合性、慢性、外来の植物片による化膿性肉芽腫性及び好酸球性潰瘍性舌炎
- Tongue: Severe, multifocal to coalescing, chronic, pyogranulomatous and eosinophilic ulcerative glossitis associated with foreign plant material.

JPCの診断

- 舌：舌炎、化膿性肉芽腫及び潰瘍性、多巣性から融合性、慢性、肉芽組織と多数の植物片を伴う
- Tongue: Glossitis, pyogranulomatous and ulcerative, multifocal to coalescing, chronic, with granulation tissue, and abundant plant material.

植物性口内炎

- ゴボウの花 (*Arctium lappa* L.) が栽培されている地域で発生し、長毛種の犬での発生率が高い。他疾病で受診した際に発見されることがある。
- アメリカでは、“Burr Tongue” (“いが”舌) としてよく知られ、臨床症状として、唾液分泌、食欲不振、よだれを伴う口内違和感、口臭、多飲症等が認められる。
- ゴボウ以外にも、ウチワサボテン (*Opuntioideae*) の芒刺、エノコログサ (*Setaria* sp.) 等によって発生。
- 家畜では、馬で、エノコログサが混入した牧草を摂取して潰瘍性口内炎を発生したという報告がよくある。牛では、大麦の芒を摂取して発生した症例が一例報告されている。



***Arctium lappa* L.**



Opuntioideae



***Setaria* sp.**